

古見の結願祭

大城 學

はじめに

結願祭のことを、八重山諸島ではキチガン、キチゴン、シティガンなどと称している。古見ではキチガンという。結願祭は、一年間の祈願の成就を神に感謝すると同時に、一年間の願解きを行う祭りである。併せて向こう一年間の豊穰も祈願する。

結願祭は、旧暦8月に行われる。一般には、チカサ（司。神女）の御嶽における神への敬虔な祈願の後、御嶽の境内に仮設された舞台上、神への感謝の意を込めた数々の歌舞や演劇等、つまり民俗芸能を上演するという内容である。

結願祭にチカサたちによる御嶽でのお籠もりを行うところもあるが、古見では結願祭にはお籠もりは行わず、豊年祭にお籠もりを行う。

古見の結願祭は、旧暦2月のユーンガイ（世願い。豊穰祈願祭儀）、同6月のプーリィ（豊年祭。収穫祭）、同10月のシチィ（節祭）、同12月のタニドゥリィ（種子取祭）などと同様、村の大きな祭儀のひとつである。しかし、過疎化のなかで、結願祭は1984年から1991年の8年間、チカサたちの御嶽における祈願だけが行われ、芸能は演じられなかったようである。

1992年の古見の結願祭は、郷友会（郷里を同じくする者が、移住先で結成した組織のこと）の協力を得て9年ぶりに芸能が上演されることになった。9月6日（旧暦8月10日。乙・酉）に結願祭が執り行われた。結願祭は、古見の歌舞や狂言等民俗芸能がもっとも多く上演される祭りである。

本稿では、1992年の臨地調査とその後の補足調査によって得られた資料に基づき、古見の結願祭における芸能の構造を明らかにしたい。

結願祭の儀礼

1992年9月6日午前8時ごろ、平西御嶽（ピニシウツカン）のチカサである仲本セツさん宅に、チカサとティジイビ（男性神職者）が集まる。チカサとティジイビに、それぞれの御嶽に献饌するハナグミ（花米）、ミシャグ（神酒）、グシ（泡盛）、カウ（平線香）が配られる。

そして、長老のチカサから請原御嶽（ウカウツカン）のティジイリイビに対して、この今年の豊作や結願祭を迎える喜びの気持ちを述べる。次に、請原御嶽のティジイリイビが、参集しているチカサとティジイリイビに同じ内容のことばを述べる。参集したチカサとティジイリイビたちは、結願祭を行うことができる喜びをかみしめ、終始なごやかな雰囲気である。

チカサとティジイリイビたちは、いただいた献饌の品々を持ってそれぞれの御嶽に行き、献饌して祈願をする。チカサたちは御嶽の神に対して、今年の豊穰を感謝し、結願祭を迎える喜び、向こう1年間の豊穰を祈念する旨の言葉を述べるということである。10時ごろに各御嶽での祈願が終わり、チカサとティジイリイビたちは帰宅する。

正午ごろ、チカサとティジイリイビたちと公民館長が、芸能が上演される請原御嶽の拝殿（ウツカンヤーという。御嶽家の意）に着席する。献饌の準備が整うと祈願が行われる。祈願の後、参集の方々は献饌したグシとマースウサイ（塩を盛ったもの）を順にいただく。請原御嶽のティジイリイビから、今年の豊作や結願祭を迎える喜び、向こう1年間の豊穰を祈念する旨の言葉が述べられた後、献饌の料理が小皿に配られる。それをいただきながら、なごやかな雰囲気ですぐに歓談し、芸能の開始を待つ。

かつては前日に牛をつぶし、牛肉も献饌したという。今年は魚を薫製にしたクバンが献饌されていた。献饌の料理は、クバンのほかにオードブルが用意されていた。

結願祭の芸能

(1) 準備、スナイ、棒術（御庭の芸能）

請原御嶽のミナカ（御庭）の入り口側には、当日の朝、舞台（サンシィキィと称している）が仮設される。舞台は10数cmの高さのブロックを土台にして、間口3間、奥行き2間の広さで畳を敷いてある。舞台と客席をさえぎる幕はなく、三方から舞台が観れるようになっている（オープンステージ）。屋根はテントを張る。

観客のすわる位置は決まっている。舞台の正面は請原御嶽のウッカンヤ（拝殿）に向かっている。ウッカンヤの中にはチカサやティジィリィビが座している。つまり、芸能はすべて請原御嶽の神に向かって演じられるのであり、結願祭の芸能を〈奉納芸能〉と称するゆえんである。

舞台の正面奥は紅型幕で仕切ってあり、その後方はジィーピトゥ（地方）の席があり、地方席の後方から上手側の空間はブドゥリィザー（踊り座）と称する楽屋である。地方の席には音響機材がセットされている。楽屋には獅子や踊り道具が並んでいる。

さて、チカサやティジィリィビたちが御嶽で祈願をしている間、村人は公民館において芸能の仕度をしている。婦人たちを中心に衣裳を調えたり、化粧をする。また、公民館の隣りに古見小学校があり、校庭では男たちが棒を打ち合いながら演技の確認を、棒術の最終の仕上げをしている。先輩の指導者が丹念に指導している。

棒術の男たちは稽古を終え、公民館で衣裳に着替える。白ズボンに白シャツ、打ち掛け、マンサージ、サシマタを額に当てて豆絞りでしめる。白黒経縞脚絆を締める者と紅色の脚絆を締める者がいる。

12時30分。芸能出演者が公民館を出発して、一列に並んで請原御嶽に向かう。道順は決められている。この芸能出演者の顔見世行列のこと（お錬り）を古見では〈スナイ〉と言う。歌・三線、笛、太鼓が先頭になって「弥勒節」と「やーらよ一節」を演唱する。その後両手に扇子を持った若衆が2人続く。2人は、音曲に合わせて扇子を持ったまま両手を左右に払いながら歩く。

若衆の後に子どもたちが続き、その後に婦人の踊り手、棒術の男たち、化粧や着付を担当する裏方の婦人たちと続く。

請原御嶽に入ると、舞台の下手側を通過して御庭に出て、拝殿前で左に廻り、舞台に向かって歩いて上手側を通過して楽屋に入る。裏方担当の婦人たちは、御嶽に入ると楽屋に向かう。棒術の一団は「ヤー、ヤー」の掛け声を掛けながら、御庭を一巡して後、棒術の演技を行う。笛、ホラ貝、ドラ、太鼓に合わせて、ティンバイ、六尺棒、三尺棒と槍、三尺棒と長刀の4組を順に演じた。次に二列縦隊になり、4組が同時に打ち合う。さらに左右の位置を変えて4組が同時に打ち合う。終わると舞台の上手側に退く。なお、笛は二人が向かい合って打ち合う前まで吹いているが、打ち合うと止み、打ち合いが終わると再び吹く。

御庭での棒術が終わると庭に塵を敷く。塵は舞台中央前から拝殿までの間を僅かに開けて、左右に敷く。この僅かの空間のことを他の島や村ではくカミミチ(神道)などと称していて、神が拝殿から舞台の芸能をご覧になるための聖なる空間である。カミミチに人々がすわって芸能を鑑賞することはないし、むやみに横切ることもしない。所定の位置に敷かれた塵の上に、観客はすわって開演を待つ。

舞台正面奥の紅型幕は、棒術の演技が終わってから吊るす。

石垣市在郷友会を中心に他地域の郷友会も参加している。郷友会の方々は芸能にも出演するし、客席にいて声援を送りながら芸能を楽しんでいる。

午後1時30分。三線と笛で狂言手事が演奏された。客席が何となくざわついてきた。いよいよ舞台上で奉納芸能が披露されるのである。以下、プログラム順に芸能を紹介しよう。

(2) 舞台芸能

(1) 「御前風(グジンフー)」

若衆2人が踊る。舞台芸能の幕開け(ザーピラキィ。座開き)の祝福芸。緋の振り袖衣裳、髪飾りあり。右手に扇子を持つ。めでたい音曲「かぎやで風節」にのせて踊る。ピキバ(引羽。入羽のこと)の演奏(歌持ち)は、狂

言手事。

(2) 狂言「長者」

祝福芸。儀礼的な〈例の狂言〉である。翁と媼の長者夫婦が子孫十数人を引き連れて登場する。翁は黒地の着物を着てミンサー帯を締め、頭に黒色を被り、白眉、白髭を付ける。右手に扇子を広げて持ち、左手で杖をつく。黒足袋。媼は薄桃色地の紅型を羽織(帯なし)、白足袋。右手にクバ団扇を持ち、左手で紅型の前衿をとる。

翁、媼、踊り手の順に下手奥から登場し、左廻りに舞台を一巡する。踊り手は下手先から下手奥、下手奥から上手奥、上手奥から上手先に立つ。翁が舞台中央先に立ち(媼は翁の後方に立つ)、前屈みの姿勢で、首里方言で祝言を述べる。

祝言の内容は、長者夫婦が百二十歳になるが健康であること、また、豊作であることを神に感謝し、この喜びの御礼に子孫に歌舞を演じさせてご覧にいれましょうというものである。祝言を述べると長者夫婦は下手先に移る。翁は椅子に腰掛け、媼は翁の側に座る。以下、子孫たちによって芸能が演じられる。

①「かぎやで風節」

若衆の仕度で、先ほど「御前風」を踊った二人が踊る。踊り終わると翁は「ユーシャン クワーンマガヌチャー」(でかしたぞ、子や孫たち)と賞賛のことばをかける。踊り手たちは軽く一礼しながら「ウー」と答える。媼は続けて踊るように命じる。一曲踊るたびにこのことを繰り返す。

②「なちじん (今帰仁)」

最年少の子ども4人で踊る。浴衣を着て、2人は赤色のマンサージを被り、2人は紫色のマンサージを被る。白足袋。4人とも右手に扇子を持つ。踊りの途中で媼が立ち上がって踊り子の側へ行き、囃して孫たちを応援する。

③「みんよーみん (耳よ耳)」

子ども2人で踊る。赤色柄の着物を着て紫色の帯を締め、赤色のマンサージを被る。白足袋。二人並んだり、向かい合ったりしながら踊る。音曲は「赤田首里殿内」。

④「てんよー」

子ども2人で踊る。赤色柄の着物を着て赤色の帯を締め、白鉢巻を前結び（向鉢巻）にする。白足袋。右手に麿を持って踊る。向かい合って麿を打ち合う所作あり。

⑤「馬ぶしゃ」

小学校高学年男子2人で踊る。白シャツ、白ズボンに陣羽織を羽織り、白黒経縞脚絆、白足袋、白鉢巻を前結びにする。腰に春駒を付け、両手に手綱を持って、曲に合わせてリズムカルに踊る。向かい合ったり、背中合わせになったりする所作がある。音曲は「とまた松節」。

⑥「いしゃどーね」

二才踊。1人。黒地の着物をあずまからげに着け、水色帯を右腰に結び、白黒経縞脚絆、白足袋、白鉢巻を前結びにする。陣笠を右手に持って踊る。音曲は「其万歳節」。

⑦「しょんかねーま」

二才踊。1人。水色着物に紫色帯。白足袋、赤色柄鉢巻前結び。中学生の女子が踊ったせいか、二才踊だが女踊の着付をしていた。2本扇子を持っておどる。

⑧「まんがにすつつあー」

女踊。1人。紺地の緋に黄色帯を締め、白足袋。両手に四つ竹を持って、打ち鳴らしながら踊る。

⑨「古見口説」

二才踊。2人。紺地の着物にミンサー帯を締め、黒足袋、白鉢巻前結び。1節目を筑登之役が踊り、2節目を親雲上役が踊る。囃子を踊り手が歌う。1節目を「一番狂言」、2節目を「二番狂言」と称することもある。

⑩「ばーち（おばあさん）」

女踊。2人。一人は黄色地の着物を着け、もう一人は薄紫色の着物を着て、2人とも帯はせず、右手で前衿をとって踊る。頭は赤色マンサージ。向かい合って踊る所作あり。音曲は「だんく節」。

以上の演目が終わると、長者夫婦は立ち上がる。翁・媪・踊り手の順で（登場したときと同様）、舞台を左廻りに一巡するようにして、「弥勒節」に合わ

せて、両手を左右に払いながら歩み、下手奥に退く。

(3) 「恩納節」

女踊。2人。紅型衣裳を帯なしで着る。白足袋。赤色長巾を頭に締めて背に垂らす。前半の「長恩納節」は、花笠を被り、チーグーシー（40～50cmの竹製の小道具。杖に見立てたもの。）を持って踊る。後半の「さあさあ節」は花笠をとり、右手に持って踊る。後半は髪飾りあり。

(4) 狂言「かざく（鍛冶工）」

4人。鍛冶工と伊武戸の2人は、黒地の着物にミンサー帯を締めて、黒足袋（劇の途中から2人とも白シャツ、白ズボン、ミンサー帯、黒足袋、赤色帯襷掛けの仕度になる）。あとの2人（下役の加那と祖良）は白シャツ、白ズボン、ミンサー帯、黒足袋、水色帯襷掛け。4人とも脚絆、鉢巻は締めていない。鉄鎚、鋏、お酒、椀などの道具を用いる。音楽は狂言手事、ほか。なお、せりふは古見方言で唱える。

あらすじを紹介しよう。農作業を割り当てられた伊武戸が、農具が少ないことに気付き、鍛冶工に農具を作ってもらおうようお願いをする。鍛冶工は、加那と祖良を呼び出す。はじめに鍛冶場を清め、鍛冶の神に祈願をして、お供えした酒を頂戴してから農具作りの作業に取り掛かる。音楽に合わせて鉄鎚を打ち、鋏で農具を挟んで掲げて、その仕上がり具合を確かめる。途中、鍛冶工が打ち上げたばかりの農具を伊武戸に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶工の耳をつかまえたり、打ち上げた農具を絶賛して、加那が「この道具ならば、2、3日かかる仕事も1日で片付けることができる」といったせりふを受けて、祖良も農具を誉めるつもりが「この道具ならば1日で片付ける仕事も2、3日かかるよ」と言って鍛冶工に叱られるといったおかし味（笑い）もある。そして、無事に鍛冶を終えて帰るという内容である。

新しい農具をつくるということは、農業にさらに勤しむということであり、豊作を予祝を意味することになる。ゆえに儀礼的な「例の狂言」といわれる。なお、鍛冶狂言は、竹富島や小浜島でも演じられている。

(5) 「世果報口説」

二才踊。1人。黒地の着物に茶色帯を締めて、紫色帯を右腰に結ぶ。白黒経縞脚絆に白足袋、白鉢巻を前結び。2本扇子を持って踊る。口説の囃子詞

はない。

(6) 狂言「たーかいし（田耕し）」

4人(村の総代と使用人の蒲太、津久利、松の3人)。冒頭は4人とも黒地の着物にミンサー帯を締めている。その後、使いの者3人は白シャツに白ズボン、ミンサー帯を締める。白黒経縞脚絆に黒足袋、水色帯の襷掛け、手拭いを腰に掛けているが、劇の途中で頭に締める。古見方言でせりふを唱える。いわゆる〈笑し狂言〉である。

あらすじを紹介しよう。古見村の総代が、使用人3人を呼んで自分の田圃を荒打ちさせることにした。はじめのうち3人とも真面目に仕事をしていたが、そのうち津久利と松の2人が怠けてしまう。懸命に働いていた蒲太が金塊を掘り当てた。他の津久利と松は自分たちにも分け前があると言い、総代に決着をつけてもらおうということになった。総代は、3人のなかで年長者に金塊をやるという。松は、自分はこの島が茶碗一つにも満たないときから生まれていると答えた。津久利は、私はこの島の天と地がまだ分かれていないときから生まれていると答えた。金塊を掘り当てた蒲太は、自分の嫡子はこの二人の者と同じ歳だと答える。総代は、蒲太が年長者だといって金塊を蒲太に渡す。得意顔の蒲太。松と津久利は互いに罵りながら退場する、という内容である。

真面目に働くと果報がつくという教訓的な意味あいの狂言だが、おかし味があり、笑いを誘う。

(7) 「鶴亀節」

二才踊。2人。黒地の着物を右肩袖抜きに着て、金欄の帯を締め、右腰に紫色の帯を締める。白黒経縞脚絆に白足袋。頭には鶴と亀の被り者をのせている。2本扇子を持って踊る。音曲は「黒島節」と「下原節」の2を用いる。

(8) 「南洋浜千鳥節」

女踊。1人。紺地の衞を着て、紫色の帯を締め、白足袋。藍傘を持って踊る。音曲は「南洋浜千鳥節」。

(9) 「古見の浦節」

二才1人、若衆1人、女2人の2組で踊る。二才は濃紫地衣裳に茶色の太帯を締め、紫色の帯を右腰に結ぶ。白黒経縞脚絆に白足袋、頭に白鉢巻前結

び。手にシノウを持つ。若衆は振り袖衣裳。髪飾り。銭棒を持つ。女一人は白色の裙に黒色の胴衣を着ける。髪飾りは、チィヂィバナ(頂花)、マイカンガン(前鏡)、スババナ(側花)、バサラ、チィユダマ(露玉)、ナミカンザシィ(波髪差し)。若衆踊の髪飾りもほぼ同様であるが、若衆踊はナミカンザシィは差さない。銭引きを持つ。白色の裙に上布の胴衣を着たもう一人の女は、両手に四つ竹をもつ。髪飾り。4人が下手側と上手側に縦一列になり、向かい合ったり、交差しながら踊る。踊り手は手に持っている小道具(楽器)を、音曲に合わせて奏しながら踊る。古見を代表する舞踊である。

(10) 公民館長挨拶

(11) 「しちょう節(かせかけ)」

女踊。2人。薄桃色地の紅型を羽織(帯なし)、白足袋。手に糸紵と杵を持つ。髪飾りあり。赤色の長巾を背に垂らす。音曲は「干瀬節」「七尺節」「百名節」の3曲。

(12) 狂言「亀組」

頭大主1人、女神1人。頭大主は黒地の着物を太帯を締め、さらに紫色の帯を右腰に締める。あずまからげ。右肩袖抜き。赤色の帯で襷掛け。白黒経縞脚絆に黒足袋。紺色の被りものを紫色の長巾で締めて、長巾は背に垂らす。額にサシマタを差す。女神は、薄桃色地の紅型をウシンチーに着る。右肩袖抜き。白足袋。髪飾りあり。赤色長巾を背に垂らす。五穀の種子の入った籠を持つ。首里方言で唱えるが、組踊調の唱え方に類似している。

あらすじを紹介しよう。頭大主が手事で登場し、今日の吉日に釣りをするという。釣り糸を上手側に投げる。すぐに当たりがあり、頭大主が亀ではないかと言って糸を手繰ると、何と、五穀の種子の入った籠を持った女神ではないか。この島の者ではない、如何なる者であるか問うと、女神はニライ・カナイからやってきた豊穰の神であると答える。女神は頭大主に五穀の種子の入った籠を渡し、稲の栽培法を教え、生産に励んで国王への貢納を立派に果たすようにと諭す。頭大主は正面に向かって両手で五穀の種子の入った籠をうやうやしく捧げ、この果報を村人に知らせようと喜びの気持ちを述べる。「伊計離節」の演唱にのせて女神と頭大主は下手に退く、という内容である。

祭祀儀礼のなかで神の世界と意識されているニライ・カナイから、女神が

五穀の種子を携えて人間の世界にやって来る。そして村人の代表である頭大主に五穀の種子を授けるといふ豊穰予祝の〈例の狂言〉である。後述する「長者の大主」でもふれるが、村人の代表である齢久しい長者の他に〈天人〉が登場するパターンがある。この場合、天人は〈神〉であり、長者に五穀の種子を授け、種子蒔きの時期と方法を教え、手入れの仕方、収穫まで教授する。古見の狂言「亀組」も同様の内容である。祭祀儀礼の世界観や神観念を考えるうえで、予祝芸能として重要な意味を持つ演目である。

狂言「亀組」が終わると舞台での芸能はすべて終了。客席の蔭が片付けられる。その間、「赤馬節」の演唱がある。終わると紅型幕が片付けられる。これから御庭で獅子舞が演じられる。

(13) 獅子舞

獅子あやしが2人出る。2人とも白シャツ、白ズボンにミンサー帯を締め、白黒経縞脚絆に白足袋。赤色長巾で襷掛け。頭に白鉢巻前結び。右手に生のクバの葉製の団扇を持ち、左手に白の手拭いを持つ。「ハイ、ハイ」という掛け声で獅子をあやす。周りでみている村人も「ハイ、ハイ」と掛け声を掛けている。獅子ははじめ1頭だけ登場し、後ほどもう1頭登場して、2頭で舞う。楽器は笛、太鼓、ドラを用いる。舞い終わると、獅子は舞台の上手に退く。

以上で芸能は終了する。

請原御嶽の拝殿で、チカサやティジイリイビによる祈願が行われる。奉納芸能が終了したという報告である。

御庭に蔭を敷いて、村人と郷友会の方々が車座にすわり、親しく情報交換する。チカサ、ティジイリイビ、公民館長、郷友会長らの挨拶がある。

午後5時をまわってお開きとなった。

結願祭の芸能の特徴

古見の結願祭の芸能の概要をみてきた。結願祭の芸能の構造などいくつかの特徴をあげてみよう。

(1) 「長者」を中心とした芸能の構造

沖縄本島及び周辺離島で、旧暦7月～8月かけて催される「村踊り」（村遊び、村芝居、ぬーばれー、豊年祭などと称する）は、「長者の大主」を中心とした芸能でプログラムが構成されている。このことは、八重山諸島の他の島で行われている結願祭や節祭、種子取祭でも同様である。

齢久しい長者の大主が登場し、村の神（御嶽の神）対して祝言を述べる。神のお加護おかげでこの一年間、一族健康で幸せに暮らすことができた。また、農作物も豊作である。ついては、向こう1年間も幸せであり、豊穰でありますようにと祈願する。お加護に感謝して、子や孫たちに歌舞を仕込ませてあるので、お目に掛けましょう、という内容である。以下、子や孫たちが若衆踊、二才踊、女踊、雑踊と盛りだくさんの舞踊を披露する。長者の大主が退場した後に上演される舞踊、狂言、組踊もすべて長者の子や孫たちの演じる芸能である。神に対して、感謝の意を込めてこれらの歌舞、劇を奉納するというのが、村踊りや結願祭の芸能の在り方なのである。

古見の結願祭も同様である。古見の「長者」は「長者の大主」のこと。まず、「長者」の祝言をみてみよう。

〔詞章〕

くりや くぬむら
 ひゃくはたちなる
 ちょーじゃぬ うふ
 ありがた わん とうじぶとう
 どうーがふゆ たぼーてい
 まんまんぬ しでいがふーだやびーる
 きゅーぬ ゆかるひに
 きゅーぬ まさるひに
 くわーんまぐわぬちゃー
 ひきちりてい
 うどういはに しみてい
 にがい かなわたる

〔訳〕

私は、この村の
 百二十歳になる
 長者の大（主）
 ありがたいことに 我が夫婦は
 健康の果報を賜り
 満々の至福でございます
 今日の吉日に
 今日の勝る日に
 子や孫たちを
 引き連れて
 踊り跳ねさせて
 願いがかなった

うふーび あぎやびん	ご褒美をお上げいたします
また にがゆしや	また、願いますことは
つちまさい まさい	年(?) 勝り勝り
にんぐ とうしあまてい	年貢も年(?) 余って
やしちぬ すごい	屋敷も優れ(?)
しら まちん んしる	稲叢の真積みも据える
うにげーだやびーる	お願いでございます
まんまんぬ しでいがふーだやびーる	満々の至福でございます
うーとーとう うーとーとう	ああ尊 ああ尊
(下手の椅子に腰掛ける)	
くわーんまぐわぬちゃー	子や孫たちよ
うどういはに しみてい	踊り跳ねさせて
ゆえーしち あすび	お祝いをして 遊びなさい
(子や孫たち、歌舞を演じる)	
(子や孫たちの歌舞を終えて)	
くわーんまぐわぬちゃー	子や孫たちよ
やどうに たちむどうてい	宿に戻って
ゆえーしち あすば	お祝いをして 遊ぼう

翁と媪の二人が登場するが、祝言は翁が唱える。未詳語が二、三あるが、詞章の意はほぼ前述のとおりである。〈長者と子孫たちの登場〉→〈長者の祝言〉→〈子孫の奉納舞踊〉→〈退場〉という沖縄各地における村踊りの芸能の在り方のパターンが古見の結願祭の芸能にも踏襲されていることがわかる。

古見の「長者」で注目したいのは、翁と媪の長者夫婦が登場するということである。翁一人が子孫を引き連れて登場するというパターンが最も多く、翁と媪夫婦が登場したり、大主一人だけ登場するというパターン、天人(神)が登場するというパターンは少ない。翁と媪の長者夫婦が登場する地域には、今帰仁村字今泊・仲尾次、読谷村字波平などがある。

(2) 沖縄本島芸能(御冠船踊)の影響

狂言の「長者」及び「亀組」の唱えをはじめ、「御前風」「今帰仁」「恩納節」

「みんよーみん(赤田首里殿内)」「いしゃどーね」「しちょう節(かせかけ)」等々の芸能は、御冠船踊や沖縄本島の芸能を取り入れたものである。八重山諸島の場合、御冠船踊や沖縄本島の芸能のみならず、本土の芸能も取り入れて、それぞれの島の芸能を豊かなものになっている。古見の「馬ぶしゃ」は本土の祝福系の芸能の一つ「春駒」である。「馬ぶしゃ」系の芸能は、竹富島や小浜島でも演じられている。

御冠船踊は、沖縄本島や周辺離島の村踊りの芸能にも多大な影響を及ぼしている。どの島でも村でも積極的に御冠船踊を取り入れ、プログラムをより豊かなものになっている。同じ演目を島々村々では競って取り入れて演じているが、衣裳や髪飾り、曲の構成、歌詞等にそれぞれに地域の特徴が出ている。それぞれの島や村の人たちの感覚にマッチした芸能として定着したのである。

(3) 御冠船踊の古い形を残す

古見の結願祭の芸能で、御冠船踊を取り入れた演目の一つに「しちょう節」がある。いわゆる古典女踊「かせかけ」である。街の〇〇〇舞踊研究所(舞踊練場。舞踊稽古場)のお師匠さんたちが踊っている「かせかけ」は、今日みる限りでは、一部の会派を除いて、ほとんどが「干瀬節」と「七尺節」の2曲で構成して踊っている。

ところが、古文獻や地方で踊られている「かせかけ」には、古見のように「干瀬節」「七尺節」「百名節」の3曲構成で踊っていることがある。八重山諸島においては、与那国島、小浜島、鳩間島の「かせかけ」が3曲構成である。入羽(引羽)の音曲は、「百名節」を演唱せず、「さあさあ節」を演唱するところもある。古典女踊が基本的には、出羽・中踊・入羽の三部構造であることと併せて考えると、古見の「しちょう節(かせかけ)」は、古い形であるといえるのである。

古見の「しちょう節」の歌詞を紹介してみる。出羽の「干瀬節」は「七よみとはてん 五色染めわけて 今日ゆかる日に 総ゆかけやびら」、中踊の「七尺節」は「杵の糸総や 繰り返し掛けて 里があけず羽 御衣ゆしらに」、入羽の「百名節」は「総も掛け満ちて 急ぎ立ち戻ら 里や我が宿に 待ちゆらでもの」である。

干瀬節は「七よみとはたいん 総かけておきゆて 里があかいつ羽 御衣

よすらね」という歌詞を演唱することが多い。古見では、余所では演唱していない歌詞を使っている。古見の先人たちの工夫であり、ここに古見の特色が出ているといえるのである。だいじにしたい歌詞である。

今回、9年ぶりに上演された結願祭の芸能調査を行った。古見在住の方々、郷友会の方々が一生懸命に舞台をつとめていることに感動した。こうした情熱が芸能を保存・振興していく大きなエネルギーになるのである。

古見の結願祭の芸能は、沖縄の村踊りの典型的なプログラムで構成されていることがわかった。狂言や舞踊をはじめ実に素晴らしい芸能の数々をみせていただいた古見の皆さんに感謝し、この芸能の灯火がいつまでも灯ることを祈念したいものである。